



た。

次の朝、精頭は宿の主人に昨夜の不思議な出来事を話しますと、

「おそらく、その娘は杉沢の里の杉の木の子でしよう。あなたさまに思いを寄せ、娘の姿になつてあらわれたのですよ。」

と主人は答えました。精頭は半信半疑でしたが、もう一度

きのうの泉まで行ってみました。

「おお、これは……。」

精頭は思わず足を止めました。辺り一面に緑の光が輝き、その中に小さな家が建っています。そして戸がすつと開き、娘が出て来ました。

「お待ち申し上げておりました、さあどうぞ。」

娘は恥ずかしそうに言い、精頭を家の中に招き入れました。

「そなたの名は。」

「はい、お杉と申します。」

娘は山里に住むものとは思えぬ淑やかな物腰で遇しました。精頭はすっかりこの娘に心をうばわれてしまいました。長い黒髪、健やかそうな頬の色、若杉を思わせる体付き、そして身じろぐたびにかすかに匂う